

畜産環境に関するQ&A

畜産環境整備機構
本多 勝男

Q

家畜ふん堆肥は塩類濃度（EC）が高いため、施用すると土壤に塩類が集積し、作物の塩類障害が心配されるとの理由で嫌われてしまいます。

オガ屑やモミ殻等の副資材を使用していない豚・鶏ふん堆肥や「戻し堆肥」を副資材として使用した堆肥は特に塩類濃度（EC）が高いため敬遠されています。塩類濃度の高い堆肥は、そんなに危ない堆肥なのでしょうか？

A

塩類を塩（しお）と勘違いしている耕種農家もありますが、塩類とは硝酸塩、硫酸塩等の無機塩類を意味します。堆肥を溶かした水のEC(Electric Conductivity、電気伝導度)値で塩類濃度を表すのは無機塩類を含む水ほど電気伝導率が高くなるからです。

堆肥に含まれる無機塩類のほとんどが窒素、リン酸、カリ、苦土等の肥料成分です。したがって、化成肥料の塩類濃度（EC）は堆肥とは比較にならないほど高く、高収量をねらう現代農業では過剰に施用している化成肥料だけで土壤の塩類集積が心配されています。このような状況で追加的に堆肥を施用するため、後から施用した堆肥が塩類集積の犯人と誤解されています。

堆肥の塩類（肥料成分）は少ないのですから、その肥料成分の量だけ化成肥料を減らすことで塩類集積を防ぐことができます。

これまでの農業では養分供給は化成肥料で行い、堆肥施用の目的は土作りであったため、養分（肥料分）の少ない土壤改良材的な堆肥が望まれていました。

このため家畜ふん堆肥のように養分濃度の高い堆肥は危ない堆肥として敬遠されてきましたが、現在はエコファーム、安心・安全等をキーワードとする持続型農業・循環型農業の推進が叫ばれ、産地間競争の大きなテーマとなっています。

持続型農業・循環型農業の具体的な意味は化成肥料の施用量を30～50%節減させることですから、持続型農業を営むには節減した肥料分を堆肥で補充する必要があります。つまり、これからの農業では堆肥は土壤改良だけでなく養分供給の役目も負うことになるため養分濃度の低い堆肥は敬遠され、養分濃度の高い家畜ふん堆肥こそが役に立つ付加価値の高い堆肥として認識されるようになるのです。

家畜ふん堆肥は化成肥料の節減と土作り・地力の増強等、一石二鳥の効果があり持続型農業や循環型農業の推進には不可欠な堆肥であることを説明し、耕種農家の誤解を解いてあげてください。